

渋沢栄一と親孝行

COLUMN
県内
大学発

経世済民

548

埼玉学園大学

渋沢栄一は現在の深谷市に豪農の長男として生を受けました。当時の世相は徳川時代末期の騒然とした様相を呈していたとはいえ、小作を束ね安定的で裕福な暮らし向きを享受していた渋沢の父、渋沢市郎右衛門元助にとつての親孝行は、長男栄一が家業を濟々と受け継いでく

村の有志と連日議論を重ね、尊王攘夷思想に基づいて高崎城乗っ取りや横浜焼討による攘夷計画を実行しようとしていました。渋沢は現代でいうところのテロを計画しましたが、結果的には未遂に終わりました。

父、市郎右衛門元助は、強壯で教養ある村のリーダーとして栄一を育てるために、神道無念流の剣術を習わせ、幼少期から漢籍の教養を身につけさせるとともに、早くから農業技術や商売の基本を栄一に叩き込みました。

仁、義、礼、忠、恕など渋沢思想ではさまざまな徳目が語られますが、これらのエピソードを見る限り、渋沢には「一見孝」を語る資格がないようにも思えます。しかし、渋沢が一般的な親不孝な息子と根本的に異なっていた点は、農民という当時の身分制度のくびきにもかかわらず、国を思う熱情が人一倍強かったこと、その理想を時間をかけて父に説き、最終的には父

大江 清一

経済経営学部特任准教授



を折伏（じやくふく）してしまつたこと（こと）です。

渋沢は『論語講義』という著書において当時を振り返り、十余の望みを許容せられ、旅費として二分金で百両を与えられた。こつした父の理解によつて、余は不孝の子たらずしてすんだ」と記述しています。つまり、渋沢の父は渋沢の理想と強い思いを理解しただけでなく、金銭まで与えかつ親元を離れることを認めたのです。

当時の時代背景を考えると、父は相当な覚悟と信頼をもつて渋沢の出奔（しゅつぽん）をゆるめたのです。親子が互いに不満を抱きながら形式的に孝行をするのは真の孝行ではなく、互

の立場を尊重しながら理解し、そのうえで子に節度ある自由を与えられたことによつて、心からの孝行が実行されるという渋沢の考え方は、このような経験に裏づけられていいると思われま

す。そして、そのような父であつてこそ、渋沢という時代の寵児が因襲や制度的な桎梏（しごく）を打ち破り偉大な業績を残すことができたのだと考えられます。「この親にしてこの子あり」という言葉が良い意味で当てはまるのが渋沢父子の関係性といえるでしょう。

渋沢が紆余曲折を経て大蔵省の租税正（そせいのかみ）に就任した折、父である市郎右衛門元助は、敬称をもつて渋沢と接したといわれています。これは現代的な感覚からすると、いかにも面はゆい話ではあります。が、親子でありながら互いの人格を尊重し、敬意をもつて接する典型的なエピソードといえるでしょう。

渋沢自身は決して家庭人ではなかつたようですが、その家系からはさまざまな分野で才能を発揮する人物が多く輩出されています。

おおえ・せいいち 1952年生まれ。慶応義塾大学経済学部卒業。埼玉大学経済科学研究科博士課程後期修了。博士（経済学）。第一勧業銀行現みずほフィナンシャルグループ、いすゞ自動車㈱、神奈川大学経済学部非常勤講師を経て、2016年4月から現職。専攻は経営学、金融史。主な著書：『義利合一説の思想的基盤』（時潮社、2019年）、「銀行検査の史的展開」（時潮社、11年）など。

と」が20歳を過ぎた栄一は